撮影・覚張紀之

徹之さんは神奈川県・川崎市の職員として老人施設で働いている。

人と違う？ OK。自閉症？ OK。心のバリアをなくす社会にしたい。

明石洋子さん あかし・ようこ　社会福祉法人「あおぞら共生会」副理事長

「長男の徹之（てつゆき）が2歳で自閉症と診断されたとき、わが子が笑顔で暮らせない社会にしたくないと思って、社会とのパイプをつくる役になろうと決めたんです」

不幸な子を持つ不幸な親だと思ったこともある。心中さえ考えたこともあった。しかし、元来、積極的なタイプ。母親仲間や専門家の力を借りながら、わが子のため、同じような障害を持った親子のため、地域社会のためにさまざまな活動を始めた。

「障害は、まず知ってもらうことが大事。差別や偏見は知らないから起きるのです。知ってもらうことから理解が生まれ、支援の輪も広がってくると思います」

'89年には地域作業所あおぞらハウスを開設し、支援を目的とするボランティアグループ『あおぞら共生会』をスタートさせた。現在では4か所のケアホームも運営している。

明石さんの30年以上にわたる活動が評価され、今年2月、国民の健康や地域社会の福祉、生活の質の向上に貢献した人に贈られる、第4回ヘルシー・ソサエティ賞を受賞した。

「私が評価されるとしたら、それはすべて徹之のおかげだと思います。徹之が生まれたことで、家族みんなが育てられたし、定時制高校の同級生も徹ちゃんといてよかったと言ってくれます。たしかに彼は、いわゆる〝ふつう〟という物差しではかると、変でおかしい。でも面白いじゃないですか。自分と違う、ふつうとは違うということを心のバリアにしないで、違いを認めて楽しめばいいんです」

障害や介護などを語るとき、社会全体の問題にすることで、私たちは無意識に自分から切り離しているのではないだろうか。

「みんなが当事者の意識を持つ。そんな社会になるといいですね」

著書『ありのままの子育て』（ぶどう社）をはじめとする3部作は、障害児の子育てを超えた本として評価が高い。